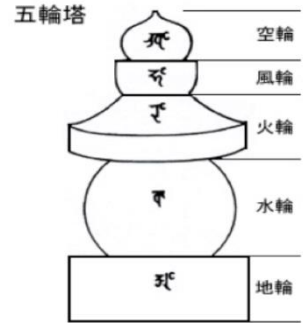


神野の一石五輪塔

一石五輪塔とは

石造の五輪塔は、一般に複数の部材を組み合わせるが、地輪から空輪までを一石で彫成した小型の五輪塔を特に一石五輪塔と呼ぶ。一石五輪塔は、室町時代(15 世紀半ばころ)から江戸時代初期(17 世紀半ばころ)に数多く見られ、主に墓標として用いられた。

その分布は、関西地方を中心に広く確認されているが、関東以北でのその数は少なく、調査報告例も希少である。



神野の一石五輪塔 2 基について

A：ドウヤマ墓塔群中央にある。銘のある正面が裏側に向き、地輪下部が埋没して設置されていた。

法量：空輪部を欠く 高さ 65 (空輪を入れると 75 cm位か?) ×幅 20×奥 16.5 cm

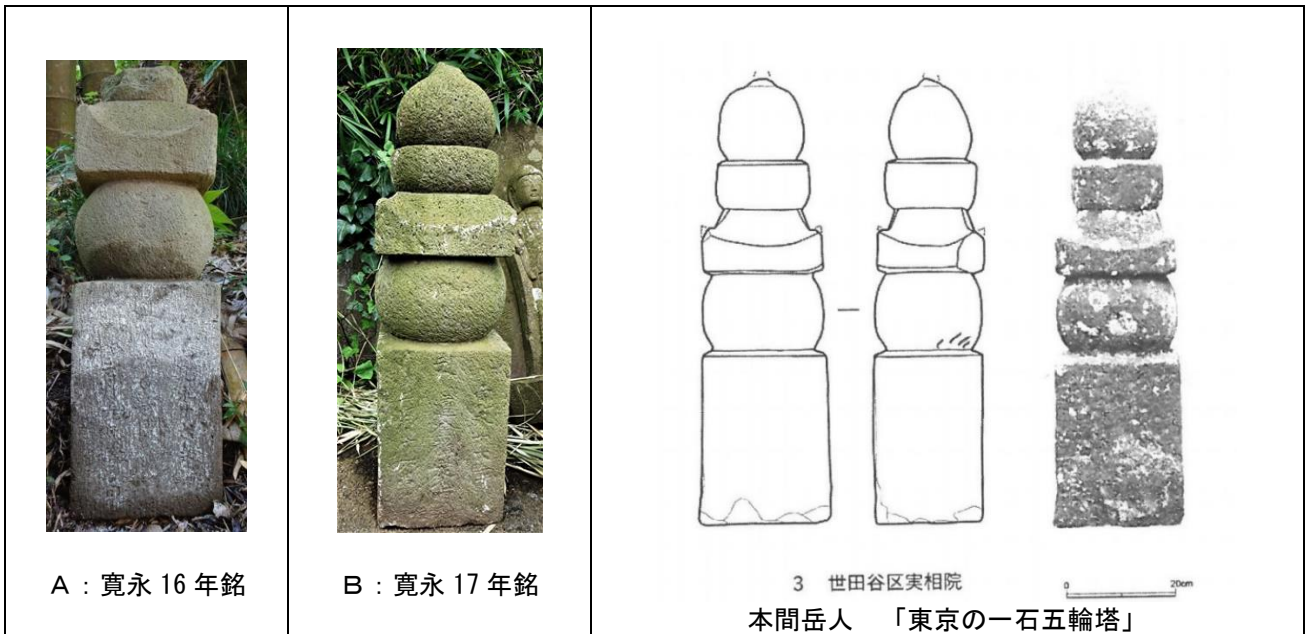
銘：水輪〔種子 ア〕 地輪「寛永十六年 (1639) /道胤禅定門 /己卯三月九日 敬白」 「道胤」は千葉氏系の帰農した武士の戒名か？

B：墓塔群の右端にあり、正面が左隣の念仏塔に接して左面を向いていた。

2020 年 7 月末までに第 2 墓地内 F 家墓地に移動、8 月に同地に再設置された。

法量：高さ 71×20×20 cm 地輪の高さ 28 cm

銘：地輪「〔種子 ア〕 寛永十七年 (1640) /道金禅定門 霊位 /二月十六日」



考察

A・Bともに、寛永期の没年銘のある江戸初期の墓塔。中世末に遡らない。

形態と法量から、関東では世田谷区実相院の一石五輪塔 (高さ 51.8 cm 無銘 17 世紀前半) に類似する。(注)

中世末の一石五輪塔は、空風火水地の各輪に「キャ・カ・ラ・バ・ア」の各種字を彫るが、本例では、真言系の一般的な墓塔の様式の「ア」を 1 字を地輪の戒名の上に付けている。なお、Aでは、地輪ではなく水輪に入れているのは、中世の名残か、または地輪の字の配置上なのかはわからない。

(注) 本間岳人「東京の一石五輪塔」『葬送・墓・石塔 論集 狭川真一さん還暦記念論文集』2019 年